

# 沈下橋建設と暮らしの変化

ミャンマー連邦共和国 マグウェ地域 アウンラン地区

メッタ橋（橋長 178 m、幅員 4.3 m）

メッタ橋はアウンランの町から南東に車で約 30 分の場所に位置する。2018 年度の事業で建てられたメッタ橋はアウンラン町側のオウシッコン村とサミヤ村の境に架かっており、22 村、約 36000 人に裨益する。この辺ではゴマ、豆などを栽培している。

沈下橋建設前の雨季の時、どのように河川を渡っていたかという、それほど水量が多くない時は歩き、または筏に 4-5 人が乗り、その筏をロープで引っばっていたそうだ。この辺の人は、河川を渡る時は替えの服を持参するのが常だった。

水位が増し、筏も出せないような時でも、どうしても向こう岸に行かねばならない状況だと、頭が出るようだったら無理して渡る人もいたという。買物であれば諦めて別の日に行けば良い。けれど、お葬式や仕事関係の急用だと無理して渡るのだった。そのような危ないことをするのは泳げる人たちであるが、流されて亡くなる人もいたそうだ。ここの河川は大人も流されてしまうほど流速が早いという。また、大雨が降ると河川が洪水し、2-3 日連続して渡れないこともあった。

雨季ではない時も一年中、水が流れる河川なので、この辺では漁をする人たちもいる。そこで雨季が明ける 10 月、沈下橋が完成するまでの 4 年間は 150 人の村人が橋を作っていた。一方通行ではあるがバイクが渡れる竹製の橋を 6 時間で造りあげるのだそうだ。橋桁は村の木材を伐採し、橋面の竹はアウンランの町で買っていた。毎年、橋を造るのに約 25 万チャツ

執筆・撮影者紹介

兵頭千夏さん

ヤンゴンを拠点に、ミャンマーの人々の生活・伝統文化・信仰・女性をメインテーマに撮影している写真家。2003 年よりヤンゴン文化大学に 2 年間留学し、ミャンマー語の通訳者、翻訳者としても幅広く活躍しています。

今回、JIP の沈下橋建設事業がミャンマーの人々の暮らしをどのように変えたのか、現地の撮影や住民へのインタビューを通して、レポートをしていただきました。



アウンラン町側オウシッコン村から見たメッタ橋と通行止めゲート

ト費用がかかっていた。バイクがある 200 世帯から 500-1000 チャット徴収し、さらに寄付を募って工面していたという。雨季が始まると竹製の橋は水流にのまれて壊れてしまうが 10-5 月までの間は自助努力による橋があるという訳だ。しかし、その竹製の橋を建てる前は、乾季や暑季でもみな足を汚して河川を渡っていたのだ。

沈下橋が建設されたことで、住民の生活に良き変化をもたらした。例えば、雨季の 8-9 月に収穫するゴマの価格は新しい方が値段は良い。すぐに売りたいでも水量が多く河川を渡れず、タイミングを逃すこともよくあったそうだ。河川が洪水し、2-3 日待たされていたこともあった。今は、電話で情報を得たら、直ちに市場まで届けることができるようになった。アウンランまでは以前は 1 時間半、今は 30 分しかかからない。

保健面においても、以前と比べると大きく変わったと村人たちはいう。まだ沈下橋のなかった 2017 年、急患が出てアウンランの病院へ搬送しようと筏に乗せ、河川を渡ったが間に合わず、亡くなってしまったと悲しい過去を淡々と語った。今は雨季でも、へびに噛まれた人、ぜんそくの発作が出た人、緊急手術が必要になった妊婦たちをアウンランの病院まで車で搬送し、命を救った。それもこれも沈下橋のおかげだと感謝する。

サミヤ村の人で沈下橋の建設現場で働いた人はいなかった。ちょうどサトウキビの収穫で忙しく、時間を割くことができなかったからだ。橋向こうのオウツンコン村の住民はサトウキビ栽培をしないので、日雇いで 3 ヶ月半ほど数人働いていたそうだ。

けれどサミヤ村の人も、毎日のように建築現場の様子を見に行っていた。手抜き工事だと感じたことは一度もなく、しっかりとした造りで安心だと思ったそうだ。サミヤ村の村長で橋建設委員会の会長でもある U Hla Htun (54) は、携帯電話に今もその時々撮影した写真を残していた。嬉しそうに説明しながら見せてくれた。村人たちがいかに沈下橋の完成を待ち望んでいたか感じられた。



サミヤ村から見たメッタ橋と  
通行止めゲート



橋の全景



バイクの往来が多い



車両もよく沈下橋を渡る

沈下橋を渡る時、子どもたちにどのように教えているか、母親の Daw Khin Mar Win(42)に尋ねると「橋を壊さないよう守るのよと言っている」という返答。子どもたちが橋から落下しないように注意するものと思っていたので意外だった。それほど沈下橋がないと大変なのだ、守っていかねばいけない財産なのだと教えているようだ。そこで、安全面についてさらに質問すると、子どもたちだけで橋をわたることはまずないとのこと。常に大人と一緒になので、これまで落下したことはないし、今後もないと思われるという。12歳くらいから友だちと一緒にバイクで渡ることがあるかもしれないが学校が夏休みとなる暑季に、水遊びに出かける程度とのこと。雨季にはバイクで外出はさせないそうだ。

実は、村人だけでなく、子どもたちの意見も聞いてもらおうと、サミヤ村の中学校に通う児童生徒たちも集まってくれていた。はじめに Daw Aye Mon Kyaw (28)先生に、学校ではどのように安全指導をしているのか質問した。「橋を渡る時は誰か大人と一緒に渡ること、橋にゴミが落ちていたら拾うようにとっています。日本に造ってもらった大切な橋なのよと教えています」と話してくれた。ちゃんと日本の支援ということが伝わっているか、児童生徒たちに「橋を建てたのはどこ？」と聞いてみた。間髪入れず「ジャパ〜ン！」と大きな声が返ってきた。

6年生の Maung Sai Zaw Zaw(11)に沈下橋のことをどう感じているか聞いてみた。これまで雨季にアウンランの町側に行くのが大変だったので、改善されてとても嬉しい。橋に手すりはないが怖くない、みんなも怖くないと思うよと意見を言ってくれた。

Daw Aye Mon Kyaw 先生はサミヤ村出身ということで、これまでの暮らしについてさらにお話を聞いた。サミヤ村には高校がないので、アウンランで寮暮らしをして通学していた。週末には村に戻るため、ずぶ濡れになって河川を渡ることもあったそうだ。雨季でも、たびたび親が食事を寮まで持ってきてくれていたそうで、そのたび申し訳なく、そしてありがたいと感じていたとい



バイクが来ると端に寄る歩行者



牛車の車輪で橋面を痛めるので渡ることを禁止しているが牛は問題ない



年中、河川には水が流れ、漁がおこなわれている



サミヤ村の村長で橋建設委員会の会長 U Hla Htun (左)とオウツシツコン村在住の橋建設委員会メンバー U Ko Oo(右) 銘版の前にて

う。大学生になってからは、バスのチケットを購入していたので授業を受けるため、河川を無理して渡ったこともあるそうだ。今は橋のおかげでとても便利になったものだと感慨深げに語ってくれた。そうして、雨にも負けず学位を取得し、地元の中学校で教師となったのだった。沈下橋がない時代に、河川を渡ってこななければならなかった先生たちは泣いて「もうやだ、帰りたい」と言っていたそうだ。「沈下橋ができた後、赴任になった先生はとても幸運ですよ。今はそんな泣き言を言う先生はいないですよ」と教えてくれた。

橋建設委員会の U Hla Htun 会長に、沈下橋完成後の雨季の様子を尋ねた。橋面よりも上に水位が増しても、約 1 時間後には水が引き、橋面よりも下になったそう。橋面よりも上に水位が増すと橋を封じ通行禁止にしており、必ず橋面よりも水が下になってから渡るようにしているのだそうだ。赤白の地覆が見えず、膝くらいまでの水位になったことが 3 回ある。その時は 5 時間くらいで橋面よりも下になったという。

大雨が降った後、橋に流木やゴミが堆積すると清掃活動に参加を促すため、家々に聞こえるよう放送し、夕方 4 時くらいから男性たちが橋に集まるのだそうだ。流木やゴミはまた河川に流すとのこと。しかし、除去活動は大変で、流木が橋桁にへばりついて人力ではどうすることも出来ない時もあったそうだ。その時はショベルカーを 1 時間レンタルし、6 万チャット支払って片付けたという。橋にかかる出費があるのに、橋維持委員会は組織されていなかった。今は、橋面を痛めないよう、牛車の往来は雨季のみとし、暑季は牛車道を利用させていることしか対策をしていないそうだ。今後も、いろいろとお金があることは分かっていると会長は答えた。

最後に何か、言いたいことありませんかと質問すると、黒ゴマを見せて橋建設委員会メンバーの U Myint Swe (58) が話した。この地域の黒ゴマはオーガニック農家と認められており、高値で仲買人に買ってもらえている。しかし、仲買人は、良いゴマと悪いゴマを分けることなく一緒に混ぜて売ってしまうので、村のゴマの価値が落ちると嘆いた。サミヤ村の独自ブランドとして売りたいがそこまでの力がない。買ってくれそうな日本の企業を知らないかと相談してきたのだった。このよう



メッタ橋とサミヤ村間の道路を村人が自助努力で整備していた



サミヤ村の中学生も意見を述べてくれた

沈下橋を建設したのはどこか尋ねると「ジャパーン！」と大きな声で答えた



サミヤ村の建設委員会メンバーと村人たち

な意識が芽生えたのも、沈下橋ができてアクセスが良くなり、経済活動が活発になったからだと思われる。思わぬ副産物をもたらしていた。

さらに U Myint Swe は自慢の黒ゴマを作っている生活が苦しいので、娘と息子が海外で出稼ぎしていると付け加えた。村の若者 100 人ほどがマレーシアやタイで働いているという。マレーシアで働いて 7 年になる娘さんとは毎日インターネットを介し、顔を見ながら話しをするのだそう。沈下橋が完成したビデオを Facebook に載せたところ、それを見た娘が村の発展を喜んで泣いていたと教えてくれた。

## 所感

沈下橋建設事業の妥当性は高く、現地ニーズに沿っており、JIP の上位目標は達成されていた。沈下橋の建築は効率よくおこなわれ、村人たちから信頼を得ていた。近隣住民の生活環境は大幅に改善され、負の影響はなく、経済的・社会的に高いインパクトが見られた。

沈下橋建設を通し、近隣の村々と連携し、さらに良好な関係を築いていることが垣間見られた。サミヤ村の住民から聞かされなかったが、同行者の U Kay Kay より、メッタ橋とサミヤ村間の道路を村の自助努力で整備していると教わった。村のさらなる発展に住民の意識が高まっていることが感じられた。

持続、自立発展のための組織作りは始まっておらず、牛車の橋通行禁止程度であった。橋の維持を目的とする組織作りを提案したい。橋建設委員会のメンバーに女性はひとりもおらず、ジェンダーの観点から積極的な参加があったとは言えない。サミヤ村の女性たちは橋の取付け部分の道路のために募金活動をし、150 万チャット寄付するなどしていた。女性の視線も活かされるよう活動にも参加してもらいたい。安全指導が体系的におこなわれているとは言い難く、配慮が欠けている。何かあってからでは遅いので、安全指導をおこなってもらいたい。

毎年、自助努力で建てる橋のために村の木材を伐採されていたが、沈下橋完成後は造る必要がなくなり、金銭的にも環境面においても改善された。

同事業は、地域住民のインフラを改善するばかりでなく、社会経済活動に貢献する意義ある事業であったと思われる。